

『第一章』について 三

昭和五十五年十一月八日

盛岡市・中央公民館 盛岡市・中央公民館

一 鏡に映った宿業の自分を見る

曾我先生の『歎異抄聴記』を勉強するのは、これが二回目ですが、十数年前のときは、通読とまではいきませんでした。とびとびながらブーツと一通り歩いて来たわけなのだけでも、足が地に着いていない歩き方で、悪く言えばあっちこっち目についた処だけ景色を眺めて、あそこの花はいいとか、ここの川はきれいだとか、あそこの山の景色はなどと、飛び飛びに通ってきた。それだけに足が地に着いていなかったような気がするのです。

出来るだけ足を地に着けようと思って歩いたのだけれども、車でサーツと走って来たような処がある。足が地に着くのが怖くて、車から降りないで降りたら良いということも分かって降るのが怖いものだから降りないで、車の上からときには窓越しに眺めてあ

だこうだと、そういうように言ってきたのが私自身の実感なので、甚だ不徹底なことなのです。

この『歎異抄聴記』を一通りブーツと歩いたということは、同時に自分自身に帰ってみると、『歎異抄』とともに、自分の人生の現実そのものをそれぞれの年令に応じて歩いて来た、その年限に相応したその人生を何らかの意味でブーツと一通り見直してきたということになるのではないかと思うのです。

それは『歎異抄』というものが一つの鏡になって、その鏡に自分のいままでの生涯を照らし合わせて自分の姿を何らかの形で見て来た。そのような気がする。そして今ここまで来たとしてみると、『歎異抄』を鏡にして、自分自身の姿を一応一通り見て来た。

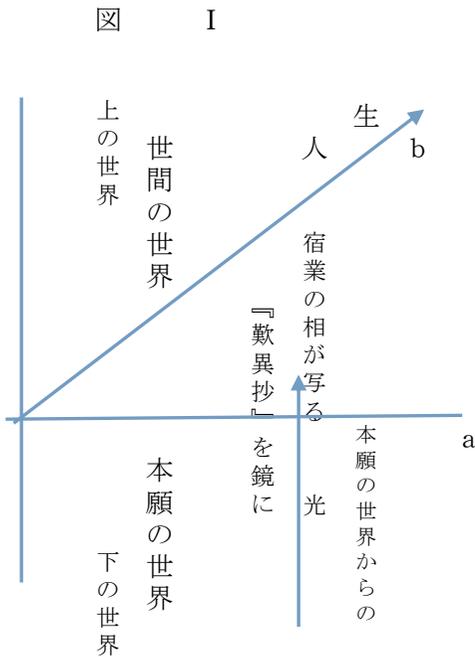
さっき申しましたように、『歎異抄』の見方そのものが、その時その時の私の思いつきみたいな見方なものですから、『歎異抄』という鏡そのものが、実は本当の鏡になっておらないで、従ってそこに映る自分の姿も事実その通りにおそらく見えていない。自分の都合の良い面だけをあっち見こっち見して、自分の姿として見て来たのだらうと思うのですけれど、まあそれなり

に自分の今までを、大袈裟に言えば自分の人生を自分なりにまとめるとまではいなくても、まとまったような形で今ここに来ているというような、そんな感じがする。

そうしてみると、いまこの『歎異抄』と自分と向かい合って、『歎異抄』という鏡とそれと自分とを向かい合わせて見た場合、そこに何が映って来るのか。それは自分の姿が映る。その自分の姿は何だというと、それが「宿業」として映ってくる。あるいは「宿業の自分」というものがそこに映ってくる。その鏡は私なら私自身をそこに映してくれているわけだが、その私の映ってくる姿は宿業という姿で映ってくる。それ以外の何物でもない。そういうように思う。

いろいろ皆さん方のご意見があったら、途中でどんどんおっしゃって下さい。そうするとそれがまた機会になってその問題の中にお互いの考えが入って行きまです。私だけ自分の都合の良いように問題に入るのが怖くて、問題を逃げ回りながらしゃべっている場合が多いものですから、それを逃がさないように引き留めて戴きたいと思うのです。

宿業というのはそういう問題だと思うのですね。『歎異抄』という言葉であるいは親鸞聖人のお心ということに替えても良いかも知れないし、あるいは浄土真宗、この場合浄土真宗即ち仏教という言葉に替えても良いかも知れない。親鸞聖人のお心を鏡としてそれに私自身の現実をそれに映して見た場合に、どういう姿としてそこに映って来るかというと、自分の姿が宿業という形で映ってくる。そういうことを曾我先生が言っておられるような気がするのですが。



『歎異抄』というのは、この世間の世界の本ではなしにこの下の世界の本なのです。つまりこの線（a）の上に『歎異抄』という本があつて、これに僕の姿が映る。だから『歎異抄』を読むというのはいつでもこちら（線a）の方向を向いて読むというのでなければならぬ。上の世界の人生上のいろいろな本がある。その本を読むのではない。こちら（線a）の方向を向いて読むのである。これが『歎異抄』である。その『歎異抄』の奥には親鸞聖人のお心がある。こういうように思える。この『歎異抄』はこの上の世界の本ではない、下の世界への本である。だから『歎異抄』の背景には下の世界がある。下の世界から発する光が『歎異抄』を鏡にさせていると言える。その光りに自分の姿を映している。そこに映る姿は何であるかというところ、これは「宿業」という形で映ってくる。宿業の相と言いましようか。だから宿業ということはこの上の世界で解釈しようとしても、これはどうも出来ないようである。お読みになつても分かるようにどうも半分つかまえたけれども半分は、なんだか逃げてしまうような

ことばかり書いてあるのですね。しつぽ捕まえたと思つても本体そのものはどっちにあるか分からない。宿業というのは、上の世界と下の世界との関係から出ている。つまり宿業の出所は下の世界なのである。言い換えればこの上の世界だけに生きている限り宿業といふことは分かつて来ない。あるいは宿業といふことは必要がない。一生涯宿業などといふことは考えなくていい。余計なことである。

宿業といふことは我々の本質に関係するものである。下の世界との関連において言い得るならば、つまり仏教あるいは親鸞聖人のお心の立場から言つて、人間は宿業的な存在である。

いまそれを結論として言うならば、余計なことであるけれども、この上の世界だけにいる人に宿業といふことは全然縁がないのだと言いましたが、しかしそれがもし我々の本質であるならば、その人にも何らかの程度にそれを感じるに違いない。

それはどういふ形で感ずるかというところ、いわゆるそれは運命だといふ「運命論」ですね。運命論という形でこの上の世界の人が感ずる。もちろん感じなくても

いいのですが、この運命論から出て来るものは当然諦めですね。運命だから仕様がないうという。

だから、宿業が我々の本質であるとするならば、それが本質であるかぎり、上の世界だけに住んでいる人は本質そのものは感じないけれども、それが自分の中の本質であるかぎり何らかの形で感ずる。その感じ方はいわゆる世間で言う運命論、決定論である。「仕様がないう、前世の因縁だ」とやっぱりにここに因縁という言葉が来る。因縁という言葉は下の世界の言葉なのでしようね。あるいは上の世界と下の世界との関係での因縁という言葉なのである。宿業と因縁とは同じ問題にかわっている言葉なのでしよう。

『歎異抄聴記』第六講 二「宿業本能の問題」のここである宿業という言葉、それは読んでいて分かるように、一歩誤ればすぐ運命論になる。これを運命論でないようにここの宿業を讀んでいかなければならないところに、なかなかややっこしいところがあるようですね。これは運命論とどこが違うのだなどという疑問が読みながら出てくる。そしてまた、この曾我先生の「本能」という言葉をどのように解釈したらいいのか、そ

こが難しい。

二、業は因縁関係が前提である。

この因縁という言葉ですが、因の方からいうと、善因善果悪因悪果、一切のものは因縁によって我々の現実の内容が出来ている。いつも出るように業は行である、おこないである。そういうおこないはそれ自身相互に、一つのもが因となり原因となつて一つの果がでる結果がでる。因果それが縦の関係である、因から果が生じる。ところが今度は因から直接に果に行くということは同時にそこに縁があるので、何かの縁は言わば横の関係でしようね。

停車場からここに来るのに、ある目的をもって因があつてそしてここに来る。しかし、ただそれだけではここに来られない。かならずバスならバスに乗る。バスという縁によつてここに来る。バスという縁がなければ、行きたいという因と、果があつてもこれは実現しない。バスというものを縁とする。バスに乗るのが目的ではない、バスがなにも結果ではない、我々の結果ではない。結果としては、この会場に私が来るとい

うことが結果である。しかし、縁を抜きにしてそのよ
うなことは実現できない。それで因と縁とを待つては
じめてここに一つの出席なら出席という業が出来る。
出席という行いが出来るわけですね。

だから朝から晩まで、そういう意味で縁と因と、縁
と因と組み合わせ組み合わせ、つまり縦横、縦横と無
限にこれが交錯して相関連し関連していく。そうし
て一つの行いが出来ている。毎日毎日の行いが出来て
いる。その行い自体がまた今日から明日、明日から明
後日とズーッと無限に続いていく。それが業なのでし
ょうね。

業はだから「はたらき」である。業そのものを端的
にとればそれだけのことです。この立場は何と言いま
すか、物理的と言ってもよいのかな、一種の。こうい
う動きそのものというのには善悪というものが
入っていない。やっかいなことは、これに善悪が入っ
て来るわけなのである。これ(図Ⅱ)は物理的にこう
なるのでしょうかね。

ところが、ここに来るにバスで来れば善いのか、歩
いて来れば善いのか。そこに善いとか悪いとかいう問

題が出てくる。これで一層、一段とこの問題が変わ
って来るわけである。そうすると、ある人は「バスで
行こう」と言う、ある人は「いや、歩こう」と言う。
それが極端にいうとそこにいろいろな争いが起こる。
あるいはそこに煩悶が起こる。問題がそこに起こるの
ですね。つまりそこに煩悶が起こる。

一緒に行くとか、一人で行くとか、あるいはバスで
一緒に行くとか。あるいはバスに乗った方が得であ
るとか、いや歩いた方が得であるとか、利害関係など
がそこに起きる。計算自身はそれは数学的なものだけ
れども、それが損だとか、得だということになると、
そこに煩惱が起こる。で、これを大きくすれば戦争が
起きるといようなことになる。

そうすると、仏教の業論は、一応はこの物理的なも
のを一つ基底に置く、そうして出来るならば善因が善
果を生み、悪因が悪果を生む。これを否定している訳
ではない。これを前提にしていることは間違いない。

これは私の考えなのだが、この世界を物理的と言っ
たらいいだろうか。価値抜きの話だから。

けれどもこれでは人生ではない。駅からここまでバ

スで来るか、歩いて来るかということは、これは人生ではない。まだ無価値の世界だから。けど駅からここに来るのにバスで乗ったら善いのか、歩いた方が善いのか。バスに乗ったほうが、それが善いなら、バスに乗った人は善人である。歩いたのが善くないというのなら、歩いた人は悪人である。そこに善悪ということが出て来る。そこが人生なのでしようね。

そういう意味で、その人生の、つまりそこに悪を避けて善をとる、極めて一般的に言って悪を避けて善をとる。それをいままで何度も言っているように、作善修行する。

たとえば仏教の基礎的なものとしては、六波羅密とこのがありますね。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、これは全部何らかの意味で悪を避けて善につくというこの方向です。これが仏教の前提になっている。これが前提だということをお忘れしようと、仏教ではなくなるのでしようね。お釈迦さんは自分自身の体験から、弟子たちにこういうようにやっていけよと、教えられたわけである。

ということは、どうということかという、悪を去り

善につくことが前提になっている。このことは、悪を去り善につくことが出来るということが前提でしょうね。悪を去り善につくということが前提だということは、同時にそれが可能だということが前提になっているのでなければ意味がない。これが《一》の問題である。

これはこれに違いないのであって、これ以外に人生はないのでしよう。そして、出来るということはただ観念的に出来るというのではない、実際にやってみることなのです。ところが親鸞聖人のところに来たときには、これが可能だということではなく、その限界の自覚、出来るはずなのだけれどもやってみたら出来ないんだという自覚、これがその次ぎの《二》の問題である。

その限界の自覚というところ、『歎異抄』の言葉で言えば、「いづれの行もよびがたき身」、言い換えれば、それを突き詰めて行けば、「地獄は一定のすみかぞかし」、こういう言葉になって出て来る。

三、限界の自覚

大事なことは、ここでいつもの宿業、業の問題で見落とされるのは、《一》から《二》へ移るところです。この限界の自覚です。悪を去り善につくことが出来るとか出来ないとかは、眺めていたのではないのである。その通りやってみた、ここで最善の努力をしてみた、してみたときに初めて人間の限界がそこに出て来た。やってみなければ分からない。やるだけやってみて、そこに人間の限界の自覚が出来た。そのときに初めて、そこに残ったものは何かというと、すなわち業の世界だけがそこに残った。それでいいね。

業の世界が残るということは、善悪は残らないということである。善があるのかないのか、それは分からない。あるのかも知れん、ないのかも知れん。けれどもここまで来たときには、「いづれの行もをよびがたき身」まで来たときには、もう善悪ということは通用しない。確かにこの上の世界で、善因善果悪因悪果ということはあるかも知れぬが、善悪ということとはもうここでは通用しなくなってしまうている。善悪を抜きにして、後に何が残るかという、ただ業だけが残る。この上の世界で言えば、事実僕なら僕がこういう背

の小さい男でいることは、善し悪しはいくらでも言える。親に不平を言うのはこれは言えるのだけれども、僕なら僕の身体で一生懸命やってみて、その限界の自覚に来たとき、五尺の男なら五尺の男という限界の自覚に来たときには、もう親が俺を五尺に生んでけしからんというそういう善悪、それによって一生終わらなければならぬ、それによってどんな損をするか得をするかということは、全然問題でなくなる。

ただ業そのものだけを、つまり業という事実だけを見る。事実だけがそこに残る。これはあるいは「真実」と言ってもいい。真実だけがそこに残る。善悪を離れて真実だけが残る。

だいたいそれで筋道は通るね。どうも言い足りないようだけれども、余り言うと僕自身混乱するしまた余計なことでもあるから、出来るだけ簡単などころだけを言っておく。

こういう話だと誰でも「しかし」と言いたい気持ちが出ると思う。どこに「しかし」があるかと言うと、限界の自覚はやるだけやってみて、つまり可能性を試してみ、自覚だということですから。

ついでにこの「自覚」というのは、事柄そのものに何か特別な知識とか何かを付け加えたものではないでしょうね。自覚というのは自分が付け加えるものは何もない。ただそのものがそこに出了たというそのものが自覚なのでしよう。いままで闇だと思ったときに、太陽の光がパッと入って来た。一切のその部屋のもものがパッと見える。それが自覚なのでしよう。

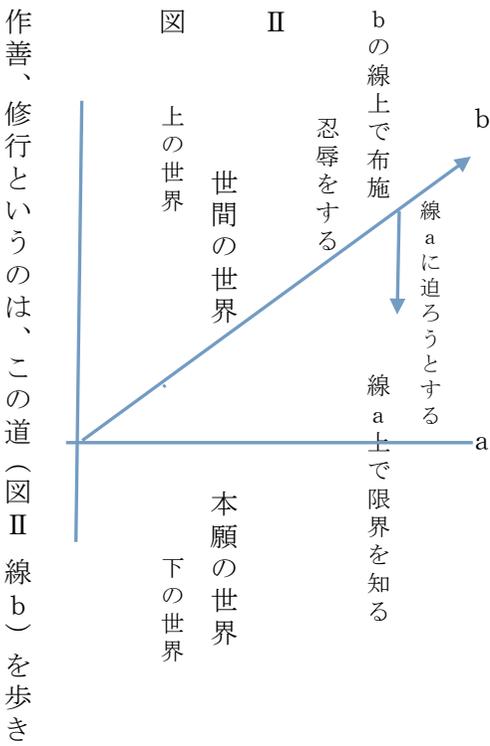
この部屋の真つ暗の中に何か自分自身で、とくに眼鏡でも付けて見て、こう見てみて「ああこれか、これなのか」と思う、そういうのは自覚とは言えないのでしようね。事実そのものがあるだけなのである。その事実そのものが真実なのである。だから自覚とはものそのものを見るだけなので、事柄そのものだけが見える、それが自覚なのである。ものそのものがものそのものを知るだけのことなのでしよう。

そこにそういうものがあるなあと、それを俺が自覚した言え、それはもう自覚じゃあない。自覚とは、僕なら僕が、これが僕だったかと言うだけしか仕様がなない。それが自覚なのである。俺が俺自身を自覚したなどと言うのはもう一步離れて見ている。

この possible の限界を知るには一生懸命に修行でもしなければならいと言え、それはまた元に帰ってしまった。これは自力である。

そうじゃなしに、そういう作善とか修行自身の限界を知ることを通しての、その自覚なのです。この限界を知るために更にその上に修行してみなければならいというのは、それはまた元に帰ってしまうだけで、グルグル回りになるだけなのです。

それならばどこを舞台にして限界を知ることが出来るか。



ながら、この道に身体がありながら、布施、忍辱などをする事によって、何かこれ（線 a）に対し、それに迫っていかうとするのでしよう。

ところがそういうことは出来ないのだと、そこでその限界を知るということには、布施、忍辱などは無駄だということになりはしませんか。成り立たないんだと。つまりある程度、その線（a）に近いこの辺ならこのこの辺までは何か少し出来たように思う。ここまでするともう少し俺は分かったように思う、けれどもしょせんはこれはこの上の世間の世界の事である。

そういうことが出来る人もあるかもしれないけれども、「いづれの行もよびがたき」という言葉の裏には布施、忍辱などは下の世界には無関係だということです。「いづれの行」ですからその「行」は上の世界の生活、この世界ですることこれが「をよびがたい」ということは、どれほど精根つくして上の世界の内容を増やしてみても、下の世界には無関係だということですから。これ（線 a）に迫ることは出来ないのだと分かる。

あるいはこう言ったらいいだろうか、作善、修行と、いうことを出来るだけ広く拡大してみたら何になるか

というと、それは上の世界の生活になる、われわれ凡人の生活になる。実生活である。特別に作善しようと思っていなくても、実はわれわれの朝から晩までの日常生活そのものが、これが作善、修行なのである。

もっと突っ込んで言うならば、それは六波羅密そのものなのだと、こういうことにならなければならぬのだと思うのだね。

ただし、この僕らの日常生活の現実の実生活が、ことごとく言い換えれば六波羅密だということは、僕らの日常生活が布施、忍辱というそういう立派なものだということではなしに、実はそれと正反對なのである。その正反對なことをどういうように言い表しているかというところ、朝から晩まで煩惱熾盛という形なのであるそれが。内容からいうならば、価値的というならば罪悪深重である。ちようどこれの裏になるわけですね。一方は布施、忍辱は立派なことである。この立派なことを人生の現実そのものに返してみると、煩惱熾盛罪悪深重としか言いようのない、それが日常世界の実態なのである。

つまり実生活から離れた特別なことをやるのではな

いのであって、実生活そのものの中に生きるということがそれがつまり限界の自覚そのものなのでしょうね。つまり限界を自覚する場所はどこであるかというところ、実生活しかない。特別にお寺に入って修行することではなしに、お経を読んで勉強するというのではなしに、特別に慈悲の仕事を俺がやっているとではない。

母親が赤ん坊にお乳を飲ます、これは布施でしょうね立派に。母親が自分自身のエネルギーをさいて子供に与えているのであるから。赤ん坊が夜中にちっとも寝させないで泣いてばかりいても、母親は夜も寝ないで子供を守ってやる。これは忍辱でしょうね、怒らないで。まあある意味ではこの頃のようにお医者さんの問題、医療の問題なども喧しいが、つまりは医療の問題はある意味では持戒でしょうね。戒を守るということである。現実の生活以外にこういうものはないのだ、と。

ないのだけでもその受け取り方がこういうように受け取る。この鏡に対して映る自分の姿が罪悪深重煩惱熾盛の姿として出て来る。こういう作善修行の者の

姿で鏡に映そうと思っただけか、かかるといふ一応は、けれどもそれが全く「仮り」であり、「嘘」であるということになる。これは仮りであり嘘であるというその実態はというと、その実態は、鏡に映る姿は罪悪深重煩惱熾盛の姿で映っている。

この《一》の因縁関係を前提としておりながら、しかもそういう善悪を論ずることが出来ないという限界の自覚、「いづれの行もをよびがたい」という自覚、これが《二》である。

この意味で仏教の業は二重の性格だと言われている。いますね。

二重の性格ということとは、「いづれの行もをよびがたき身」だから、何もしなくても良いのだと、手をつかねていればそれでもう世の中は済んでいくのだということではないということ。つまり決定論ではないということですね。

決定論になる前に、この現実の生活そのもので勝負しているわけである。決定論では決していない。決定論なら、もう俺の運命だからもう仕様がな、じつとしていようということになる。諦めてしまおう、何もし

なくても諦めてしまおうと。そういう決定論ではないので、あくまでもその意味ではやっぱり一種の人生そのものが修行なのでしょう。修行なのである。

だから、宿業論であるからといって、人生が運命論に決定されて仕様がなないと諦めるのではなしに、上の世界にはその意味では善は善、悪は悪で、悪を去って善につくとそういう現実の努力がそのまま、その努力があつてこの人生が成り立っていくのでしょうか。だが世間はそれだけのことである。この上の世界だけを考えるとなつたのである。俺も善いことをしなければならぬ、勉強しなければならぬ、丈夫になつて偉い者にならなければならぬ、金を儲けなければならぬ。こちら下の世界をまったく忘れていた。

ところがこの仏教の宿業ということは、上の世界の裏付けが下の世界にあるということなのである。下の世界を上の世界の裏付けにしてはじめて、宿業論が決定論、運命論にならない。

というのは、この線（a）を自覚の線としますか。この自覚の線を通っているから、あるいは自覚の線によつてこの人生を裏付けられている。上の世界は言わ

ば無自覚の世界である。無自覚だから決定論になつてしまう。

そういうように考えて見るとですね、甚だハッキリしないような言い方ですが、そういう関係だとしてみると、因縁関係が前提でありいずれの行もおよびがたいというこの両方の自覚の根源というもの、自覚が生まれて来る根源、自覚という力が出て来る根源、それを曾我先生は「本能」と言っているのではないか思うのですがどうだろう。そういう自覚が出て来るのは本能なのである。

いままで、どつかあやしい処があつたかな。あやしい処があつたらおしゃつて下さい。私も出来るだけ破れがないように障子の穴があかないように、こう紙をあつちに貼りこつちに貼りしながら、危な危なともかくここまで来たわけです。だが疑問は無限に出て来ます、出て来ますけれども、その疑問と疑問との間の紙一枚のところをズーツとつたつて来て、だいたいそういうおおよびな気持ちをもつていて、気持ちを一応そこにまとめ置いて、「宿業本能の問題」を読めばどうか納まるような気もするのだが。

それにしてもこの「本能」ということについては、曾我先生のこの文章の中にも何か飛躍があるようであつて、ハッキリ言うべきところを出しておられないような気もする。非常に曾我先生は直感的な人だそうだから、金子先生だとそのところをもう少し直感の中に入れて、分析的に話してくれるのだけれども、端的にハツと言つてしまうものだからどうも「煩惱・・・」というところは、どっか飛躍があるようです。

三、「宿業は本能である」

大体そういうことを気持ちの上で持った上で一応読んでみますか。疑問を持ったところは途中でどんどん突っ込んでみて下さい。『歎異抄聴記』東本願寺刊 七八頁） 「二、宿業本能の問題」です。

「人生におきましては、当面の問題は要するに善悪の問題である。」

これは問題がないでしょうね。我々は五十年いままできたけれども、朝から晩まで何をやっているかとい

うと善悪の問題である。議会で毎日毎日何を論じているかと言つたら、何が善いか何が悪いかと善悪の問題である。

「この善悪の問題がはつきり解決できなければ、人生はまったくひとつのくらやみである。永遠にその迷いの中にとじこめられるのである。すなわちわれわれはまどい、すなわち迷信邪教に動乱される。」

つまり善悪が分からないから、この人生の上でバスに乗つたら良いか歩いたら良いかということが、はっきり分からないものだから、何か他のものにすがつてこれを決めてもらおうと思う。そこには自覚の線がないですね。何かの他人の手を借りようと思う。それが迷信邪教である。

「異学異見別解別行の人の為に動乱される。」

それはこうしたら良い、ああしたら良いと横から、つまり横からですね、異学異見というのは、根源から

ではないのであって横からである。

「これはなにかという即ち本願の深信ということ
を欠いているからである。」

曾我先生の『歎異抄』の本であるから、当然この言葉でよいのだけれども、一般的な場合にこういってころにすぐ「本願の深信」などと出て来たのではさっぱり分からなくなる。つまりこの上の世界（図Ⅱ参照）に対して、本願の世界下の世界を考えろという。下の世界を考えないから上の世界だけで何とか始末しようとするから、そういう問題が出るのだと。

「全体我々は善悪の問題は昨日よりいうが如く、人間と動物はちがう。」

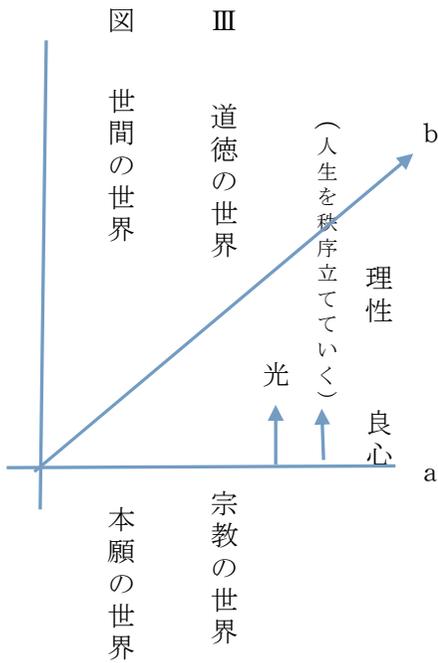
この辺は分かるのですね。

「動物は本能のみをもっている。」

そこに本能という言葉が出ている。この本能という言葉と後の方の曾我先生のおっしゃる「本能」というのは、どうもなんだか違うように思うのだ。

「人間は本能とともに理性をもっている。」

理性という問題が出て来ましたね。これでちょっと問題が複雑になる。



この図（図Ⅲ）と関連させて理性をどのように考えたらいいのだろう。理性は僕の感じからするならば、この地平線（線 a）から発する光だと思う。人生を照らす光である。それはそれでいいだろうな。ただし、何のための光であるかというそれは人生を明るくする。暗がりの人生、混乱した人生を歩いて行けないから、電車道は電車道、人道は人道、車は車、川は川、鉄道は鉄道というように秩序だてていくために、理性というものが必要である。それによって現実の人生の内容を整理していく。一応そういう意味でどうだろう。理性の役目というものは。それをもっと深めていけばそれは法律とか経済とかいろいろ深い理論の中までも理性の力には違いないけれども、おおざっぱに言えばそういう理論によって現実を整理していく、統制を与えていく。

問題はその理性のここのところ、理性をどの程度つまり理性の出所がどの程度の深さかということには、おそらく理性論ではいろいろ問題はあるのではないかな、歴史的に。ギリシャで考える、あるいは中世のキリスト教的立場で考える、ないしは近世のカント以

後の人間自覚の立場で考える。この理性の根源の意味はこれは相当複雑な、あるいは段階的なものがあるのではないか。

だから簡単にこの（a）線をこう引いて良いという人もあるし、それでは浅すぎるという人もあるかも知れないと思うのだが、しかし、その深さの程度によってこの理性がこの現実にはたらく、現実に対してはたらく作用自身もまた変わってくる。つまりこの理性をどの程度に見るかということによって、その人の現実そのものが余程変わってくるだろうと思う。それを本当は西洋の思想の中からも各時代ごとにはつきり突き止めて考えるのが本当だと思うのだけれども。

きわめ卑近な立場で言えば、一般の人とキリスト教の人との現実の生活の内容がどうか違うというの、なにかキリスト教の人の理性というものの深さとか、そういうとまたどっちが深いのか浅いのかということが問題になるが、ともかくその深さによって確かに違うからね。牧師さんなどはどのように考えておられるか。一般の信者はどの程度に考えているか。

けれどもそこは別の問題として、ただ常識的に理性

の効用をこの現実で考えれば、まずいま言ったような意味が理性の仕事だと。そこで例えば良心というのは理性の根拠が、あるいはここ（線 a）に良心の立場があるのではないかと私は思う。その良心は下の世界へは入って来ない。下の世界に支えられているのだけれども、その支えられているということのまたその自覚の意味が違ってくる。けれども通常上の世界は道德の世界であると言うならば、下の世界は宗教の世界と言うならば、良心の問題は道德の世界の一つの根拠でしょうね。それは良心というものも宗教という問題と関わらないわけではない。ただしその時には宗教が、この現実の世界から見た宗教としてのその関わりの「良心」であるのではないかな。

別の立場で言うならば、こういう立場で良心というのは一体どういうふうに扱われるのだろうか。「いづれの行もよびがたき身」（第二章）、「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり」（後序）などと言い放っている立場で、いまの良心というのはどういうふうに扱う。つまり宗教の世界で良心というものをどういうふうに見ているのか。これは次元が、世界が違うのだから、

上の世界には、この意味での普通の常識で解釈している。たとえば学校で、生徒に「お前の良心に恥じよ」となどと生徒に対して言うときの良心は下の世界には直接には触れておらんようだと見ていいのではないかな。

あまりこつちにはばかり気が取られてしまったが、いや何を言おうとしたのか、少し忘れてしまった。そう「本能」ということを言おうとしたのですね。この道德の世界で理性を持っていると、この理性という言葉をここで曾我先生が書いている範囲内においては、この上の世界に対してのみ意味があると言うことに一応しておきましょう。下の世界まではこの理性は入って来ない。

「これは現代人の考えである。」

この理性は何をするかというところ、現実を整理しなければならぬから、整理するためには善悪が分からなければならぬ。

「我々は理性に依って善悪を知ることが出来る。」

この世界は道徳、すなわち善悪の世界である。理性によって善悪を知ることができるといえるのは常識的な意味での言葉でしょうね。それは現代人の考えである。

本当に知ることが出来るかどうか。

「善悪を知って悪を捨て善を行うことが出来る。知ると共に行うことが出来る。これを行ない得たのははつきり知ったからである。」

たしかにはつきり知れば、はつきり行なえる。そこまではいいでしょうね。これは川だから、川だということがはつきり分かれば、じゃあ橋を架けなければならぬ。橋を架けることが出来る。川だということが分からないのでは橋を架けることも出来ない。

「で人間の理性がはつきり輝いたならば、善悪を知り善を行うことが出来るといふ。そして善悪はなにが

善かなにが悪かはつきりきまったものであると我々は考えている。然るに仏法に於きましてはこの善悪、我々が人生に於いて最もはつきりしたものは善悪の二つであるというが、仏法よりいえばこれはわからぬもの、人間の理智では知ることの出来ぬものである。」

ここのところはどうだろう。これを見ると何だかおかしなことを言っているようだけれども、裏から言うとな、これは面白いと思うのだ。これは仏法では善悪は分からないとこう言っている。それならば理性で、善悪が分かたらどうだという。何もかも理性で善悪がはつきり分かたらどうなる。これは現実がなくなってしまうね。つまりこの世が極楽になったと同じなわけである。

いま極楽の話はおかしいのですが、食べたいものはいくらでも食べられる、それが極楽だと一応書いてありますね。ところがよく考えてみると、食べたい物がいくらでも食べられる、自由自在に食べられ、欲しいと思っただけすぐそのものがワーツとどっからか出て来る、そうしたら食べるということが意味がなくなるの

ではないか。事実、極楽では食べないのだと書いてある。欲しいと思ったらワーツと山のように目の前に出て来るけど、その人は食べないで匂いを嗅いだだけでスーツとまたそれは消えて行くのだという。それならいったい御馳走を食べるといふことは成り立たないのではないか。はじめから何もなくてもいいわけである。

もし理性で何もかも分かるのだったなら人生というもののはかえって意味をなさなくなる。むしろ理性が分からぬところがあるから理性なのである。混沌としている現実に対して、何か分かるうと思つて入つて行くところが理性なのである。いままで原子核というものとは全然想像もつかなかった世界であつた。それを物理か化学の力で分けて行つて分けて行つて、こんなものもひよつとしてあるのではないかと暗闇の中を更に分析して、原子核というものを持つて来た。それでよいのである。

世の中は真つ暗なのである、本来は。その真つ暗だから理性というものが意味を持つ。それは上の世界なのですから、この暗闇の世界を理性というもので明るくしていこうと、上の世界はあらゆるものを作り出し

発見し分析して見付け出そうとしているので、これが理性なのである。

理性は下の世界には必要がないのである。仏教は理性では分からぬというが、分からぬでいいのである。分かるのは上の世界だけ分かればいい。

上の世界では御馳走をうんと作つて、いろいろ御馳走を作り出して、食べたい物を理性で分析して御馳走を作る。

下の世界に来れば思つただけで御馳走はすぐ来る。風呂に入りたいと思つたらお湯がすぐザーツと自分の身体に注いで来て、身体を洗い流してくれる。もういいと思つたら、水がスーツと引いてなくなつてしまう。それならば初めから風呂に入る必要も何もないわけである。下の世界は理性では分からぬというのはそういう意味だと思う。この言葉だけを見ると、とんでもないことを言っているようだけでも。

「然るに仏法におきましてはこの善悪、われわれが人生において最もはつきりしたものは善悪の二つであるというが、仏法よりいえばこれはわからぬもの、人

間の理智では知ることのできないものである。すべて善悪は」

そこでいよいよ本論にはいる。

「凡て善悪は宿業として生まれながらにしてわれわれに與へられたものである。」

ここのところどうも分かりにくいですね。つまりここはさつき言ったように、事実が事実としてあるということだけだという意味だろうと思う。善悪の入らない現実の人生がそこに既にあるというだけなのである。

別の言葉で言えば業として、業そのものがそこにもうすでにある。われわれがそれに理性という立場から、善とか悪とかいうことを、それに外から言わば付け加えるだけである。

付け加えなくたって「柳は緑。花は紅」で、人が悲しもうが泣こうが、花を見て酔っ払おうが、花を見て別れを惜しもうが、花の散るのを見て泣こうが、花自身はいっこうそれに関係はない。善悪に関係なしに花

は咲き、鳥は鳴く。

事実は事実としてある。つまり業は業としてそこにある。だから言い換えれば、宿業として生まれながらにしてわれわれに与えられたものだ、というような言葉で言うしか仕様がなない。われわれはもうその中に生まれてしまっている。

「それ故に、われわれは人間の理智をもつてこれを知ることとはぬ。また知ったとしても意の如く行ふことは出来ぬ。ここでは然らば宿業とはどんなものかといふと、私は宿業は本能であるといふ。」

はなはだ済みませんが、会があるものですから、五時半の汽車で行かなければなりません。今日はここまでで。この先が業の本能云々の問題になるのですが。有難うございました。以上

